

『敗戦真相記』を読む/敗因-6「セクショナリズム」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートもいよいよカウントダウンに入り、バトンパスまであと10回。「軍事学/地政学」シリーズの8回目は、永野護氏が「科学的マネジメント」に並び、太平洋戦争敗戦の「真因」に挙げた「陸海軍の不一致」を掘り下げ、それがもたらす弊害を考えます。

その1: 日本の中の「陸軍国」と「海軍国」

永野氏は太平洋戦争に敗れた「真因」として、「科学能力の脆弱性」に続き、それに匹敵する致命的な「陸海軍の不一致」へと論を進めます。

さて当初「海陸軍」であった順序が、西南戦争など内戦の影響で「陸海軍」に入れ替わって以来、両者の縄張り争いはさまざまな形で続いてきました。それは後に外地にも及び、少ない情報や武器、兵站などを補完し合うどころか、終には人前で食糧や原材料、燃料を奪い合うほどになりました。その見苦しい姿は、彼らが士官学校で学習したはずの?「内輪揉めによる落城」の実演だったのです。

またもはや誰が敵か味方か分からない事態を目の当たりにした当時の国民が、総力戦どころか厭戦気分陥ったのも無理からぬところです。

その2: 「セクショナリズム」の弊害

さて「陸軍国」と「海軍国」の対立とは、いわば究極の「セクショナリズム」。彼のカルロス・ゴーンが来日して初めて知ったという言葉の由来はともかく、それ自体は人間が定住して農耕を始め、その集団が拡大、分派することにより必然的に発生した意識と考えられます。まして我が民族の場合、逃げ場のない島国に生まれ、稲作由来の協働意識と「村八分」という同調圧力の中で育てば、否応なしに強い「セクショナリズム」が身に付きま

す。また本来それを修正すべき文明教育が、逆に余計なことを考えず、ひたすら上意に従うことを教えただけでなく、陸軍などではさらに徹底強化されてしまいました。そして彼らが権力を握った結果が、永野氏のいう「誤った目標」「慢心」「独善」という「敗因」3点セットだったのです。

「セクショナリズム」の弊害は、自分たちだけがつねに正しく、他は間違いという思い込み。そこでは思考の偏向や排他性ばかりが強化され、社会人に必須な「共感(≠同感)性」が一切育ちません。

☞参照 『三々な経営』

2-13 「リーダー」の役割

2-20 ミドル・マネジャーの役割

☞参照 「四字熟語」で考える経営戦略

Y-09 「実践計画」を考える・その2

☞参照 「広告コピー」で考えるマネジメント

C-03 「賛成1、反対9。どちらも、間違いじゃない。」

その3: 「セクショナリズム」の防止策

しかし真の怖さは、その組織下方への蔓延と、それがもたらす弊害。すなわち「セクショナリズム」は限りなく細分化を繰り返し、遂には末端まで行き着くのが宿命です。上からは「線」しか見えないその「壁」は、下位にいくほど実務の「面」が拡大し、上意実現の巨大な「障壁」となるのです。

もっとも太平洋戦争の場合、「陸海軍の対立」の先に待っていたのは陸軍の「独裁」。それはまた戦力の大半を喪失した「海軍」を尻目に、残った体力を温存して本土決戦に挑むという、自暴自棄な計画を伴いました。永野氏はその反省から、「あくまで合理的に計画的に道徳的に設計され、全国民の意志で決定されるような仕組み」を構築し、二度と「独裁」を許さない国として再建すべく、講演の後半では種々の具体的な提言を行っています。

しかしすべての基礎は、それに関わる人間の「民度」。「セクショナリズム」「独裁」共に否なら、所属する組織において、皆さんは氏のいう「仕組み」を潤滑に動かす「歯車」になる必要があります。そしてその間の「遊び」となるのが「人間力」です。

とはいえ氏が待望する「大人物」は、いまや「リスク」そのもの。「複雑系」の社会に求められる「リーダー」とは、従来のカリスマではなく、メンバーの自発的な「リーダーシップ」を融合し、社会が望む貢献に向け試行錯誤を続ける「先達」なのです。

2022年11月7日 実空